琉球大学学術リポジトリ

芥川龍之介「西方の人」「続西方の人」論

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-07-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/977

芥川龍之介「西方の人」「続西方の人」論

小澤保博

A consideration on R. Akutagawa's
The Man in the West
(including The West、2)

Yasuhiro OZAWA*

(Received May 31、1990)

*Department of Japanese Language, college of Education, University of the Ryukyus.

〔目次〕

1、「西方の人」（1）
2、「西方の人」（2）
3、「西方の人」の評価
4、「続西方の人」

1、「西方の人」（1）

昭和文学は、実に芥川の死をもって始まる。一つの時代が一作家の死によって開かれたという事実は、注目に値することである。事実上彼の絶筆となった作品「西方の人」及び、「続西方の人」は、単に昭和文学のみならず昭和という時代への予言的意味合いを持っている。これらの作品の巻末に記された「昭和二年七月十日」あるいは「昭和二年七月二十三日の日付は一体何を意味しているか。事実上遺稿となったこれらの作品への理解は、芥川文学の最終的な到達点を知る事を意味するばかりでなく昭和文学そのものの大きな流れの一つを掴むことになるはずである。

「芥川龍之介に於けるキリスト教思想」、主として前記の二作品の中に盛込まれたこの主題に就いては、過去に於いて既に幾多の論が展開され、既にその評価も定まった感じがあるが、本論はそうした過去の芥川論を踏まえながら、唯美的な見地から私見を述べようとするものである。

芥川文学の中に於いて大きな一分野をなしているキリシタン物と呼ばれる作品群の中にあって、「西方の人」及び、「続西方の人」が独特の光芒を放っているのは、それなりの理由があってのことである。それは、「クリストは今日のわたしには行路の人のように見ることはできない」という彼自身の言葉が示しているように、芥川自身の信仰の問題に関わるからである。彼がどの程度キリスト教徒の心情を理解し同調したか、あるいはまた、信徒にならんとしたかを「西方の人」が示しているからである。芥川自ら「彼是十年ばかり前に芸術的にクリスト教ー殊にカトリック教を愛していた」というふうに、純粋に唯美的な趣味から「煙草と悪魔」を初めとするキリシタン物を創作した時点と、晩年に於いて「西方の人」を執筆した時期に於いては、彼自身の心情がキリスト教やキリスト教徒に対して幾分違っていることだけは事実であろう。仮に彼の「僕は基督教を軽んずる為に反って基督教を愛したのだった。僕の罪を受けたのは必ずしもその為ばかりではあるまい。けれども僕はその為にも罰を受けたことを信じている」（「ある鞭」）という言葉が真実の告白からはほど遠いものであったとしてもである。

それでは、「西方の人」と「煙草と悪魔」以下のキリシタン物との間に一線を画しているのはなんであろうか。「わたしはただわたしの感じた通りに『私のキリスト』を印すのである」という芥川の前書きの後に登場するキリストは、確かに作者の独創的な着想により肉付けされた紛れもない「わたしのクリスト」であり、それは「西方の人」を支えている二つの理念ーマリアによって示された「永遠に守らんとするもの」、さらにキリストあるいは聖霊によって示されている「永遠に超えんとするもの」ーと共にこの作品に於ける芥川の勝れた独創である。この相反する理念をどのように捉えるか、それはそのまま「キリスト教への本質的な理解にしても通じているのである。

「マリアは永遠に女性なるものではない。ただ永遠に守らんとするものである。聖霊は必ずしも聖なるものではない。ただ永遠に超えんとするものである」という芥川の言葉はひどく漠然とした感じを読む者に与える。この漠然さあるいは曖昧さが、キリストとマリアという二つの相対立する立場への自由な見解を許しているのである。我々は芥川自身の

次のようなマリアについての説明の語句から、マリアの意味する対象を見出さねばならない。「我々はあらゆる女人のうちに多少のマリアを感じるであろう。同時にまたあらゆる男子のうちにも―。いや、我々は炉に燃える火や畠の野菜や素焼きの瓶や厳畳にできた腰掛けのうちにも多少のマリアを感じるであろう。」作者自身のこの言葉から、マリアの意味する対象がどうやら作者が従事していたところの芸術生活、創作活動から懸け離れたところにあること、それはおそらく芥川自身が普段意に介さなかった人間の生活、就中彼自身の日常生活をも意味していたのであろう。そうしてそこに於いては、当然彼が次のように侮辱の言葉で見下していた一般大衆の生活が営まれていたはずである。

「彼は梯子の上に佇んだまま、本の間に動いている店員や客を見下した。彼らは妙に小さかった。のみならずいかにもみすぼらしかった。『人生は一行のボオドレエルにも若かない』彼は暫く梯子の上からこういう彼らを見渡していた。」（「或阿呆の一生」）

「一行のボオドレエルにも若かない」と見下した人間の生活に対して芥川が晩年、それも死の直前に至って「永遠に守らんとするもの」であるという認識を抱いた事は、一人の唯美的傾向を持った作家に於ける大きな変化である。かつて「戯作三昧」を書き、「地獄変」を書き「枯野抄」を書いて憑かれた人々に対する限り無い共鳴を示していた頃の芥川にあっては考えられないことである。

「クリストの母、マリアの一生もやはり『涙の谷』の中に通っていた。がマリアは忍耐を重ねてこの一生を歩いて行った。世間知と愚と美貌とは彼女の一生のうちに住んでいる。」このように捉えられたマリア像が芥川独自のものであることは言うまでもない。このことに就いては、何よりもまず作者自身が最初に「マリアはただの女人だった」と言っている事からも明らかである。

マリアは芥川にとって聖母を意味しない。それはただ「愚」と「美徳」の不思議にまじりあった社会そのもの、―芥川にとっては創作活動を離れた実生活を意味していた。

それではある夜聖霊に感じてマリアが生み落としたキリストとは何か、我々はこのこのキリストの中に数々の芥川作品の影を見るだろう。あるいはまた芥川自身の姿をも見るかも知れない。結局このように見てくると、「マリア＝生活」を地盤として、「クリスト＝作品あるいは芸術生活」を生み出す聖霊とは、彼にあっては、唯美的な芸術感覚、つまり美意識であることが分かるはずである。芥川の作家生活は、マリアの言葉に示された「世間知と愚」に囲まれた彼の日常生活の中から、彼を聖霊という名の彼独自の唯美主義の力によってキリスト的世界に脱出させるものであったはずだ。彼は一体何度この「永遠に守らんとする」世界を打ち捨てて「永遠に超えんとする」世界への脱出を試みたことであろうか。彼の生涯に於ける創作生活はとりもなおさず、マリアの世界に生活する芥川のクリスト的世界への脱出の試みではなかったか。こういう夢を抱いている彼にとって「聖霊＝美意識」はしばしば、大きな力を貸し与えたはずである。この手段となった芸術感覚を支えたのは、彼の旺盛な読書生活であった。

クリスト的世界への突入を図った彼の体験は、しばしば彼の作品の中にその痕跡を残している。無論、同じ体験でもその作品の創作時の違いによって微妙な差が見受けられるのは当然である。

「ヴォルテエルはこういう彼に人工の翼を供給した。彼はこの人工の翼をひろげ、易やすと空へ舞い上がった。同時にまた理智の光を浴びた人生の歓びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行った。彼はみすぼらしい町々

の上へ反語や微笑を落としながら、遮るもののない空中をまっ直に太陽へ登って行った。丁度こういう人工の翼を太陽の光に焼かれた為にとうとう海へ落ちて死んだ昔の希臘人も忘れたようにー。」（「或阿呆の一生」）

この場合、「聖霊」という言葉は使われずに代わりに「人工の翼」という言葉が使われているわけであるが、その意味するところの内容は同じ事である。「人工の翼」の力を借りてクリスト的世界への参加を行おうとする彼の前にある運命は、死である。

「人工の翼」が太陽への接近に連れて何の役にも立たない事は、自明の事実であるが、この見解はずっと以前から芥川作品の中に於いて示されている。「人工の翼」を焼かれて死んだ一芸術家の運命、「地獄変」の主人公良秀の一生は作品執筆の大正七年四月に於いては、作者にとってはそれほど大きな意味を持たなかったが、芥川は後年この「人工の翼」を焼かれて死んだ一芸術家の最後に恐怖感を抱いている。（「歯車」3　夜）

「永遠に守らんとするもの」いわば、マリア的生活に安住する事の出来ない人間が、「聖霊」あるいはまた「人工の翼」によりキリスト的世界への参加を希望した時、彼の前に立ち塞がっている運命が死であるという事実は、そのこと自体既に悲劇的な事と言わなければならない。このことから分かるように芥川文学の悲劇性はその当初から存在していたのである。

このようにかなり以前から見られた芥川文学に於ける暗い影は、「西方の人」に於いてキリストの姿を通して見事なくらい明確にされている。

「クリストの一生は短かったであろう。が、彼はこの時にーやっと三十歳に及んだ時に彼の一生の総決算をしなければならない苦しみを嘗めていた。（中略）天に近い山の上には氷のように澄んだ日の光の中に岩石らの聳えているだけである。しかし深い谷の底には柘榴や無花果も匂っていたであろう。そこにはまた家々の煙もかすかに立ち昇っていたかもしれない。クリストもまた恐らくはこういう下界の人生に懐しさを感じずにはいなかったであろう。しかし彼の道は嫌でも応でも人気のない天に向かっている。彼の誕生を告げた星はーあるいは彼を生んだ聖霊は彼に平和を与えようとしない。」

（「西方の人」25　天に近い山の上の問答）

生活を離れて芸術の世界に生きんとする芥川の意思は、「西方の人」以前に於いても虚構という名のもとにしばしば示されていたが、しかしこれほどはっきりと、いわば自己告白に近い形で示されるというような事はなかった。

「ただの女人」にすぎなかったマリアに示された日常生活から離れ、「天に近い山」のそれも「氷のように澄んだ日の光の中」に立ちすくんでいるキリストの姿、彼の見下している視線に映じるのは、「家々の煙」であり、「拓榴や無花果」の匂いであった。「クリストもまた恐らくはこういうキリスト像を記した芥川にあっては、「西方の人」のキリストは完全に他人ではなくなっている。「クリストもまた」と嘗いた芥川は既にその瞬間に於いて、虚構という立場を離れて、私小説家並の自己告白を行っているのである。あれほど極度に告白を嫌った芥川であったのに（「澄江堂雑記」参照）。

キリストの中に自己を同化させた直後にあって、「彼の道は人気のない天に向かっている。彼を生んだ聖霊は彼に平和を与えようとしない」という言葉が、もはやキリストとは懸け離れたところで、作者自身の率直な自己告白になっていることは自然の成り行きである。文学上、唯美的な作家として日常生活からの脱却を図った後も、現実社会を実生活者

として生きている人々の姿は、芥川に多少の羨望を与えたであろう。「人工の翼」により天井世界への突入を図り、みすぼらしい町々へ侮辱の視線を投げ掛けた後も、決して人間の世界への思いを断切る事は出来なかった。「下界の人生」への思いを残したまま芥川の道もまた「人気のない天に向かっている」のである。

かつて完全なる芸術至上主義者の世界を描いていた頃の彼にあっては考えられる事ではない。無論、その頃の彼にあっても多少の逡巡さが作中に残されていた事も事実であるが、それらはある種の叙情性と見られ、作者の精神及び肉体両面が衰弱するまで表面に出る事はなかった。傑作と言われる芥川作品に於いて見られるこれらの叙情性は、後の「西方の人」に至っては、「芥川自身の悲劇的運命のアナロジイをキリストに求めようと」したという指摘の根拠にもなったのである。

（笹淵友一「芥川龍之介のキリスト教思想」解釈と鑑賞533－8）

キリストは、「彼の誕生を告げた星」と「聖霊」とにより地上の平和な生活を阻まれている、と芥川は書いている。このことから我々は、芥川自身が自己の作家生活をどのように見ていたかを知る事が出来るのである。彼は、一つには運命により、一つには芸術的な情熱の為に、「天に近い山」に至るための創作活動を止める事が出来なかったのである。

こうして苦しい創作生活の果てに登りつめた「天に近い山の上」は「氷のように澄んだ日の光の中」、岩だけがそびえているような、いわば死の世界であった。芥川は「氷のような」世界で「如何に生くべき乎」という悲劇的な間を何度も繰り返さねばならなかった。彼の運命の前に迫り来る「見苦しい死」を頭の隅で意識しながら―。結局、「25　天に近い山の上の問答」は、芸術家としての芥川と一市民としての芥川の内部葛藤と見るべきなのであろう。

この古くて新しい芸術家の精神内部に於ける対立の問題は、芥川にあっても例外ではありえなかったわけだが、問題提起までは平凡であっても、その解決にあっては、芥川のそれは極めて独自な展開を示しているのである。

「西方の人」の中に於いて芥川が我々に示した芸術家の自己救済の方法について見ていく前に、芥川のそれがどれほど独特のものであるが明確にしたいと思う。あらゆる人間の抱いている問題を、芸術家気質と市民気質あるいはまた、人生と死と言った対立する概念によってとらえたトーマス・マンの作品、「トニオ・クレーゲル」は、「永遠に守らんとするもの」を拒絶し、自己の意思の赴くまま「永遠に超えんとするもの」の導くままに生きんとする一人の青年の物語である。

芸術によってしか生きていけない人間であるトニオは、自分とは無縁の人間、つまり絶対に悩む事がなく、過去を振り返ってみることもなく、頑丈な心と神経を持った人達（ハンス・ハンセンやインゲボルグ・ホルム）に対して、軽蔑の念と同時に強い憧れの気持ちを抱き、その憧れの気持ちはあまりに強く、最後には「インゲボルグ。ホルム、おまえのような娘を妻にめとり、ハンス・ハンセン、君のような人を息子に持てたら」といった気持ちの高まりまで達するのであるが、最終的にはトニオの歩む道は、荒涼とした精神の世界、芸術の世界で生きるようになったトニオは、突然彼の少年時代の悲しみの街、故郷に帰るのであるが、市民社会への参加を希望する彼の意思は、そこに於いても激しく拒絶されるのである。

「永遠に超えんとするもの」の導くまま精神の世界で生きてきた者が、下界の人生の懐かしさに引かれて、天上世界から芸術の世界に止まったまま手を差延べても激しく拒絶されるのは当然である。皮肉や自己認識、

創造の情熱などによって、「永遠に守らんとするもの」マリア的な世界を離れた者が、作品創造のために、人工的に作上げた興奮状態に精根を使い果たし、病みほうけた姿をさらそうともそれもまた当然なのである。　いわばマリア的世界を離れた者が、当然の事として経験しなければならない苦しみ－芸術家の宿命を前にしてのトニオのすすり泣きには、芸術家精神の普遍性がある。この場合彼の悲しみの原因である侮根と郷愁が、彼が過去に於いて捨ててきた実生活「永遠に守らんとするもの」へのそれである事は無論である。

下界の人生の懐かしさに引かれて、あるいはまた天上の世界の苦しさから逃れるためにトニオは故郷に帰り、地上の生活から拒まれていることを確認し、失意と悲しみを抱きながら再び「氷のような澄んだ日の光り」、芸術の世界で生きようと、静かに決意するのである。

トニオが「柘榴や無花果」の匂いに引かれながらも「永遠に超えんとするもの」の導くままにあくまで、「天に近い山の上」にとどまろう、荒涼とした芸術の世界で生きようと決意するこの「トニオ・クレーゲル」の終章の部分、一度はマリア的世界に立ち戻ろうとした一芸術家が、避け難い自己の芸術家としての宿命に目覚めて、再び「永遠に超えんとするもの」の導くままに苦難の道を歩みつづけようとする姿は、多くの後進の者の共感と賞賛を受けるであろう。

これに対してキリストに自己を仮託した芥川は、自分の芸術家としての宿命をどのようにみているのか、「西方の人」に於いて芸術家の自己救済は果たしてなされているのか、どうか考えてみたい。

「クリストの一生はみじめだった。が、彼の後に生まれた聖霊の子供たちの一生を象徴していた。クリスト教はあるいは滅びるであろう。少なくとも絶えず変化している。けれどもクリストの一生はいつも我々を動かすであろう。それは天上から地上へ登るために無残にも折れた梯子である。薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に傾いたまま－。」（36「クリストの一生」）

「西方の人」が晩年の芥川の精神状態を知るために、重要な意味を持つことについては既に述べたが、「天上から地上へ」というような考えが見られる事自体「地獄変」や「戯作三昧」執筆時に於いては考えられない事であり、芥川の精神史にあっては大変な変化といえるだろう。はからずも芥川は、死を前にして、「永遠に超えんとするもの」への執着を捨てて、彼が生涯を賭けた芸術への道を自ら閉じ、「一方のボオドレエルにも若かない」と侮辱の言葉を浴びせた「永遠に守らんとするもの」マリア的世界に立ち戻ろうというのであろうか。

トニオが、皮肉と自己認識によって荒果てた自己の精神に対して侮根の情を抱きながらも、なお一層芸術家としての自己を再認識することにより、再び新たな荒涼とした精神の世界、文学者としての道を歩もうと決意することから比較してみれば、晩年の芥川が芸術家として敗北を認めた事は、芥川文学あるいは、芥川龍之介という一作家を捉える上に於いても、注意しなければならない事実である。芥川もまた、決して対象を認識し分析する事に就いてトーマス・マンに劣るものでないことは、「永遠に超えんとするもの」に導かれて辿り着いた「天に近い山」を、「人気のない」あるいは「岩むらの聳えている」というふうに捉えていることからも伺う事が出来るはずである。芥川の考えている芸術の世界もまた、氷結し、荒涼とした精神の世界であったわけだ。

しかし、「西方の人」に於いて芥川は、精神の世界を死の世界として描いている。少なくとも地上から「天に近い山」に近づくにつれて、生は衰え死の色が濃くなってくる。つまり一面に於いては、芥川は「永遠

に超えんとするもの」に導かれて、「天に近い山」に至らんとする者を敗北者として見ているのである。このことは地上のものを「柘榴」「無花果」「家々の煙」といった生の色彩で捉え、天上のものを「氷」「岩むら」「人気のない」といった死の素材によって統一している事からも納得することが出来るはずである。

芸術生活が死の影に満ちており、天上生活が、そのまま破滅への道を示しているのなら、「天上から地上へ登る」という言葉も、そのままま芥川の率直な気持ちとして読取る事も出来よう。いわば荒涼とした精神生活に耐えられくなった芥川の芸術への敗北の言葉として、あるいはまた暖かい人間の匂いのする生活への復帰、死の世界から生の意欲へ回帰せんとする言葉として理解することが出来るはずである。

しかし、芥川は自分が過去に戻る事が出来ないと、良く知っていたようである。「自分は大川あるがゆえに『東京』を愛し、『東京』あるがゆえに、生活を愛するのである。」（「大川の水」）とまで言った、「滑かさと暖かさ」とに満ちていた生活は、死の直前の再晩年にあっては、再び芥川のものとはならなかったようである。「それは天上から地上へ登るために無残にも折れた梯子である」という一行には、地上の生活を拒まれた芥川の悲痛の声が聞こえる。

2、「西方の人」（2）

佐藤泰正の「西方の人」論（「近代日本文学とキリスト教試論」昭和38）（「西方の人」論、『国語と国文学』昭和45・2）とそれに対する笹淵友一の「芥川龍之介とキリスト教ー『西方の人』について」（「芥川龍之介のキリスト教思想」『解釈と鑑賞』昭和33・8）（「西方の人」論『国文学』昭和41・12）は、芥川の「西方の人」の本文の一箇所をめぐって展開された論争である。それは、（36「クリストの一生」）の中の次のような文章である。

「けれどもクリストの一生はいつも我々を動かすのであろう。それは天上から地上へ登るために無残にも折れた梯子である。」

芥川が原稿の締切りと、迫り来る死に追われて、書き記したこの部分の順序を「地上から天上へ登るため」と変えるため笹淵友一は、長文の実証的論証を成した。それが前記の二論文であるが、笹淵はこれによって佐藤への反論を成し、それと同時に「西方の人」の本文を作者に代わって書き換えようとしたわけである。結果的には、前者は成功し、後者は失敗したというべきであろう。

「西方の人」（「改造」昭和2・8）「続西方の人」（「改造」昭和2・9）は、いずれも作者芥川に再読の機会を与えなかった事は、「続西方の人」に於ける冒頭の次の文章が証明している。「わたしはわたしのクリストを描き、雑誌の締め切日の迫ったためにペンを抛たなければならなかった。」

「西方の人」は雑誌の締め切り日に追われた状態で書かれたものであるし、「続西方の人」は、迫り来る死に追われて書かれたものである。それ故に事実上の遺稿を意味するこれらの作品には、完全主義者である芥川が不本意に濡らした彼自身の生の声や、隠すことの出来なかった啜泣きが聞こえて来る訳で、そこに作品としての「西方の人」の面白味と不完全さとがあるわけである。

芥川が不本意に犯した誤りも、（5「エリザベッ」）に於ける次のような誰が見ても客観的に誤りであるような箇所はこれと言って問題はないはずである。

「マリアはエリザベツの友だちだった。バプテスマのヨハネを生んだ

ものはこのザガリアの夫、エリザベツである。」

この場合、夫が妻の誤りである事は紛れもない事実であるが、芥川の意志を尊重してか、角川の芥川全集に於いては改められていない。しかし、いずれにしても誰が見ても芥川の誤りであるような文章の訂正など問題はない。問題とされるのは、佐藤泰正の「西方の人」をめぐる種々の論文に於いてしばしば引用している次のような箇所である。

「それは天上から地上へ登る為に無残にも折れた梯子である。薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に傾いたまま―。（36『クリストの一生』）」

この箇所は、笹淵友一も述べている事あるが、芥川のキリスト論のいわば中心となる部分であり、（1「この人を見よ」）から（35「復活」）までは、（36「クリストの一生」）の章全体を導き出すための序章の役割しか果たしていない。

「『西方の人』がその結末に近付くまで『永遠に超えんとするもの』としてキリストをモティフとして貫かれていることを認めざるを得ない」（笹淵友一）とある通りである。

笹淵友一は、「西方の人」の全文脈に於いて「永遠に超えんとするもの」に関係した部分、あるいは「永遠に超えんとしたもの」を他の言葉で言替えたと思える箇所を全て引用した後、次のような結論を与えている。

「『36　クリストの一生』は繰返し、繰返し語られたこの発想の重みを受け止めている。そしてこれと矛盾する『天上から地上へ』という発想は、35までには全く介在していない。」

しかし、笹淵友一も認めているように、「天上から地上へ」という発想は存在しなくても、マリア的世界への懐旧の思いが、キリストの心をしばしば強く捉えたことは確かであり、キリストの後向きの姿、天上世界を指向した彼にとってはあまりにも弱々しい姿が「西方の人」の内部に介在している事も事実である。「けれども彼のマリアという女人の子供であることは忘れなかった。」（12「悪魔」）「母のマリアを顧なかった彼はなぜラザロの姉妹たち―マルタやマリアの前に涙を流したのであろう？この矛盾を理解するものはクリストの―あるいはあらゆるクリストの天才的利己主義を理解するものである。」（23「ラザロ」）

「彼らはいずれも一時代を―あるいは社会をこえられなかった」（24「カナの饗宴」）「クリストもまた恐らくはこういう下界の人生に懐かしさを感じずにはいなかったのであろう。」（25「天に近い山の上の問答」）

「わが父よ、ものできるものならば、この杯をわたしからお離し下さい。けれどもしかたはないと仰有るならば、どうか御心のままになすって下さい」（28「イエルサレム」）「『古来英雄の士、悉く山河に帰す』の歌はいつも我々に伝わりつづけた。が『天国は近づけり』の声もやはり我々を立たせずにはいない。」（37「東方の人」）

それぞれ引用した箇所は、「飛躍する天上からマリアの地上へ向けて無限に帰還しつづける還相」（「芥川龍之介のなかの知識人と大衆」国文学、梶木剛昭和45・1）というほどに激しいものではないが、しかしキリストの抱いたある種の逡巡の気持ちを不本意にも示しているのである。これを見ればわかる通り、キリストの道は一直線に天上に向かっていたわけではない。

「聖霊」に導かれて、「永遠に超えんとするもの」に至らんとするキリストの意志は固かったのであろう。しかし芥川によって創作された「西方の人」は、あまりに「暖かい心臓」を持っていたために、作者の

意志に反して、しばしばその期待を裏切り、自己の意思に反して自分が捨ててきた「下界の人生」への思いを断つ事が出来なかった。そして「下界の人生」には、彼の失った全てのもの、精神の平和と幸福な生活がある。

このように「マリア」と「聖霊」の間に立って苦悩するキリスト像は、芥川独自のものであり、あまりにも芥川的に描かれているために、いくつかの問題を生む事になった。

「地上から天上へでもなく、天上から地上へ降ることでもなく、『天上から地上へ登る』という屈折した一語の裡にこそ、文学と宗教が示されているのではないか。」（「芥川龍之介管見」佐藤泰正）

（36「クリストの一生」）が（1「この人を見よ」）から始まった芥川のキリスト論の総括でありまた結論である事は、多くの論者の一致した意見であるが、芥川が「西方の人」の構想上の焦点とも言うべき箇所に於いてなした不注意は、今日までも解決せぬ難解な問題を我々に残す事になったのである。笹淵友一は次のような理由を列挙し、「天上から地上へ登る」という芥川の本文を「地上から天上へ登る」というふうに訂正している。

A「冒頭の『この人を見よ』から終止一貫して強調されてきた『地上から天上へ』という発想が劇的に大旋回をとげるためには、それを必然とする強力な心理的動機がなければならない。」

B「『天上から地上へ登る』という言葉が論理的に説明されていない。又文体の上において芥川の心理的屈折が見られない。」

C「『天上から地上へ登る』という言葉は冒頭の『彼は母のマリアよりも父の精霊の支配を受けていた』という文章と照応しており、完全に矛盾している。」

以上大体笹淵友一の考えを三つに分けてみたが、多少とも問題が残るのはAの指摘であり、「終止一貫して強調してきた地上から天上へという発想」という表現が果たして妥当であるかどうかという事である。

既に列挙した通り「地上から天上へ登る」というモチーフを支えると思える芥川の叙述の箇所は「西方の人」の全文脈に於いて十六箇所という多くに互っている。この点からのみ見れば問題はなさそうであるが、同時に列挙した正反対の思想。「天上から地上へ登る」という立場に立った叙述の部分も全体で六箇所ほど見られる。これら六箇所の芥川の文章に対して、笹淵は、「多少気になるが」とかあるいは又「しかし要するにそれだけのことであって」という言葉で処理しているのは、多少疑問である。

BとCの指摘に就いては疑問の余地は存在しない。「もちろんクリストの一生はあらゆる天才の一生のように情熱に燃えた一生である。彼は母のマリアよりも聖霊の支配を受けていた」という冒頭の文章が、（1「この人をみよ」）から（35「復活」）までのキリストの叙述の全てを収斂させて章末の「クリストの一生はみじめだった」以下の文章に続いていることについては異論はない。中に組みこまれたゲーテ論はあくまでも「聖霊の子供」としてのキリストの姿をより明確にするために展開されたものである。

ゲーテがキリストと違って静かな晩年を迎える事の出来たのは何故か、その理由に就いて芥川は次のように述べている。「聖霊はこの詩人のうちにマリアと吊り合いを取って住まっていた」と。つまりゲーテにあっては、彼の芸術的欲望は実生活を突き倒すほどに激しくなったわけだ。というよりもむしろ芸術的情念と肩を並べるほどに彼の生活意欲が大きかったと言うべきか。これに反してキリストの一生が惨めだったのは、

彼が自己の精神内部にある「聖霊」に吊り合うだけの実生活を持たなかったからである。そして「我々のゲェテを愛するのはただ聖霊の子供だったためである」という言葉の中には、「マリア」よりも「聖霊」を大事にしたいと考えている芥川の意思がある。

しかしこの事はそのまま「芥川が自らもまた人生を犠牲にしても聖霊の子の志向を放棄しまいと考えていたしるしでもある」（笹淵）という激しい天上志向の言葉に繋がらないのではないかと思う。

以上見てきたとおりBとCの笹淵友一の指摘は、（36「クリストの一生」）の構造を捉えた見事な論文である。ただ笹淵は「地上から天上へ登る」というモテーフを確信するあまり、芥川の意図したもの以上の思索を「西方の人」から引出そうとしているように思われる。芥川に肉薄した結果、作者の意思を超えてそれ以上のものを求めようとしているように思える。無論、笹淵の書いたものは論理的な根拠を持った研究論文である。これに対して佐藤の書いた一連の「西方の人」論が、いくつかの独創的な視点に支えられながら、読者を感心させる側面を持ちながら、一般読者を納得させるだけの理論的根拠を持たない事も確かなのである。

それならばこの二つの「西方の人」論が全く交わらない理由は何か、それは単に批評文と研究論文の違いというような単純な問題ではない。率直に言って両者は、「西方の人」論として勝れているであろう。前者は何人をも納得させる論理的根拠を持った実証的研究故に、また後者はその独創的なアイデアに於いて決定的な違いを見せている。

どこからこうした相違が生じているのか。それは佐藤泰正が「西方の人＝芥川」とみているのに対して笹淵友一が「西方の人＝キリスト」として見ているからである。「西方の人＝芥川」として見る限りに於いて「聖霊」に導かれて「天上」に至らんとする「永遠に超えんとするもの」の精神は、そのまま芸術家芥川にとっては栄光を意味している。

母なる「マリア」のもとに帰ろうとする事がそのまま敗北になる事もまた自明である。これに対して「西方の人＝キリスト」として見た限りに於いては、キリストがマリアの手に帰し、地上の祝福を受ける事はキリストの敗北を意味しない。

それならば同じ「西方の人」を読みながら何故このような見解の相違が両者の間に於いて生じたのであろうか。その理由は、「西方の人」本文中にあると思う。「わたしはただわたしの感じた通りに『わたしのクリスト』を記すのである」と「西方の人」の冒頭に於いて芥川は意見を述べている。しかしこの言葉は、最終的には、彼自信を裏切る事になったのである。

ルナンの「イエス伝」、ワイルドの「獄中記」、パピニの「基督の生涯」などを参考書として、福音書を教科書として創作された「西方の人」が、芥川独自のイエス・キリスト伝であることは確かであるが、その本文はしばしば芥川の意志に反して、「わたしのキリスト」ではなくむしろ「わたし自身」を描いているのである。

こう考えると既に引用したはずの次の言葉が再び蘇って来る。「彼自身の人間性のアナロジィとしてキリストを描こうとする欲求の結果」（笹淵友一）

芥川の意図したものは、完全に達せられた。いや完璧なほどに達せられすぎたと言ってよいかも知れない。雑誌の締切りと迫り来る死に追われていた芥川にとって「西方の人」キリストは「行路の人のように見ることはできない」訳で、この時の芥川の心境は、キリストに仮託して己の心情を告白するというような生易しいものではなくて、彼は何度も作品内部に於いてキリストという仮面を脱ぎ捨て読者の全面に登場し己の

心情を率直に告白しているのである。

「誰がご苦労にも恥じ入りたいことを告白小説などに作るものか」（「澄江堂雑記」）と大言壮語した昔の芥川の姿は「西方の人」に於いては最早見ることは出来ない。少なくとも「西方の人」は、作者と作中人物との間に完全に一線が画されていた初期の芥川作品とは、その趣を異にしている。

それでは具体的に「西方の人」のどの部分に於いて芥川は、キリストに仮託した自己ではなくて、裸の自分を語っているだろうか。

（1）「少なくとも我々に迫って来るものは我々自身に近いものだけである。クリストはあらゆるジャアナリストのようにこの事実を直感していた」（19「ジャアナリスト」）

（2）「クリストは奇跡を行うたびに必ず責任を回避していた。『お前の信仰はお前を癒した』」（16「奇跡」）

（3）「彼の道はただ詩的にーあすの身を思い煩わずに生活しろということに存している。（中略）クリストはともかく我々に現世の向こうにあるものを指し示した。」（18「クリスト教」）

（4）「後代はクリストを『神の子』にした。それはまた同時にユダ自身の中に悪魔を発見することになったのである。」（29「ユダ」）

以上取上げた（1）…（4）までの「西方の人」の箇所は、キリストを離れたいわば芥川の独創の働いた場所である。部分的には、芥川自身にデーモンが乗移り自己を語り過ぎたところであるが、個性的な思想という形をとりうる箇所はそう多くない。その中に於いても上記の指摘は、いかにも芥川的ではある。

こうした他の作品に見られない、いわば「西方の人」だけがもっている芥川的逆説に注目して書かれたのが、佐藤泰正のものである。無論、そこには論理性がないので読者を納得させ得るだけの説得性を持たないわけ迄あるが、しかしこと「西方の人」にだけ限って言えば、その行間の裏に隠された芥川の声に、それが実証的裏付けを持たない故に自由に肉薄しているのではないか。

例えば上記の（18「クリスト教」）に就いての解釈であるが、芥川はここに於いてまず第一に、キリストを「ロマン主義者」として捉える事によりキリスト教を「詩的宗教」であると理解している。さらに彼はこの理解を根底として「ソロモンの栄華」と「一本の百合の花」とを比較検討している。そして芥川は、次のような結論を下している。

「『ソロモンの栄華の極みの時だにその装い』は風に吹かれる一本の百合の花に若かなかった。」芥川によれば壮麗なソロモンの建築は野の百合に及ばないというのである。ここにおいて芥川に対する最初の疑問がある。「ソロモンの栄華」と「野の百合」とを比べて「野の百合」の方が素晴らしいと見るのが、絶対的にロマン主義者の見解であるかどうか。さらにそれに続く言葉、「あすの日を思い煩らずに生活しろ」というキリストの言葉が、真にロマン主義者のそれであったかどうか。以上の二点に就いて見た限りに於いても芥川の福音書理解とその延長線上にあるキリスト像が独創に満ちたもの、芥川的なものであるかが示されているのである。

「野の百合」に価値をおいたりあるいはまた、「あすの日を思い煩わずに生活しろ」と呼掛けたキリストの言葉は、決してロマン主義から発した言葉ではない。「ソロモンの栄華」に思いを馳せて、一方に於いてその日その日を思い煩って生きる人々に対して投掛けられたキリストの言葉は、真にリアリストとしての生活者のそれであった。

「播かず、刈らず、倉に収めざるに、汝らの天職はこれを養っている」

とか、あるいはまた「狐は穴あり、空の鳥は巣あり。然れども人の子は枕する所なし」というような、いわばキリストの精神主義を表現したと思えるような聖書の言葉を芥川は、ロマン主義者のそれと理解したのである。

ところでキリストの行為の今日に残っているのは、こうした現実を無視した言動によるのではない。「野の百合」よりも「ソロモンの栄華」の偉大さを称えるイエルサレムの人々に、物欲を離れる事により、人生の真実を見るように説き回った行為によりキリストは今日に残っている。いわば物に対する欲望を捨てよ、とキリストは言っているのである。その意味から、所有の概念を捨てていたキリストの姿は、現実には放浪者のそれであったように思える。

「『狐は穴あり。空の鳥は巣あり。然れども人の子は枕する所なし』と言った。彼の言葉は恐らくは彼自身も意識しなかった、恐ろしい事実を孕んでいる。我々は狐や鳥になるほかは容易に塒の見つかるものではない。」（37「東方の人」）

この芥川の言葉には二重の意味の於いて誤りが存在している。まず第一に芥川はこの言葉を人の世の困難さを示しているものと捉えている事であり、第二にその意味するところが、キリストの意図したところにより深いと言っているのである。

つまり、キリストが自分の発言した言葉の本当の意味するところの残酷さを理解しなかったと言っているわけであるが、事実はそうではない。この場合の「人の子」が、その発言者であるキリスト自身の事を述べている事は無論である。彼は寝る場所を持たないほどに所有の意欲を持たない自己を誇りにして、上記のような発言をしたわけである。そしてこの彼の発言の裏には、一時といえども貪欲さから離れる事が出来ずに常に自分の所有物を増すために争いを繰返していた、当時のイエルサレムの人々の姿があった。

このように「西方の人」には論理的な実証的研究の追随を許さぬほどに、論理の飛躍が見られる。こうした芥川の精神の燃焼の高みまで覗くためには、実証的裏付けをある程度無視した批評文もまた必要なわけである。さらに「西方の人」の正確な読解のためには、笹淵の実証的研究が必要な事も無論である。ところで笹淵友一が「西方の人」論に於いて示した最終的な結論は次の通りである。

「天上への志向が悲劇的契機につながることは3、7、12、18、21、24、25、27、28、31、等によって明らかであり、その反対に浪漫的憧憬―永遠に超えんとするものを離れた地上の生活には平和があることを12、25は示唆しており、そして地上への志向が悲劇の契機となることを示唆する表現は全くない。」

以上の如く笹淵が示した三つの結論は、「西方の人」に於ける根本的な骨組みであり、「永遠に守らんとするもの」は悲劇を意味せず、そこには平和が有すること。さらに「永遠に超えんとするもの」にはただ悲劇だけが存在している事、こうした事実は揺るがない。笹淵が「西方の人」の実証的論理的作業により導き出した三つの芥川文学に於ける根本的テーゼ、これらが時として多少の違いを見せながら、この根底に於いて動揺を示さない事は事実である。

笹淵が導き出した結論が、単なる「西方の人」だけに止まらず、かなり広範囲に互る芥川文学の根本テーゼである事を示したい。つまり芥川が「西方の人」に於いて示したモチーフは、かなり以前から芥川作品の於いて顕著である事を示したい。

いわゆる芥川のキリスト教思想を示すものとして取上げられる作品群

がそれであり、主題がより適確に示されている事で、「おぎん」（大正2・8）をその典型的な例として見ておきたい。

大阪から両親と共に長崎まで流浪してきたおぎんは、その地で両親を失い、浦上の山里村の農夫じょあん孫七とその妻じょあんなおすみの養女となり、まりあという洗礼名をもらって幸福な生活を送るようになるが、しかし三人はあるなたらの夜、役人に掴まってしまう。土牢の中に閉じこめられた三人は天主のおん教えを捨てるようにという拷問を受けるが、はらいそ（天国）の門に入るのはあと一息の辛抱であるとして、三人とも信仰を捨てようとはしない。やがて火刑にするために村はずれの刑場へ引出された彼等は信仰を捨てよという役人からの最後の宣告を受ける訳であるが、ここに於いておぎんが突然「私はおん教を捨てることに致しました」と答えるところが、この小説の言わば頂点である。やがて縄を離れたおぎんの次のような言葉が芥川のキリスト教思想を見る上に於いて多くの読者の注目を集めている箇所である。

「あの墓原の松のかげに、眠っていらっしゃるご両親は、天主のおん教もご存知なし、きっと今ごろはいんへるのに、お堕ちになっていらっしゃいましょう。それを今わたしは一人、はらいその門にはいったのでは、どうしても申し訳ありません。わたしはやはり地獄の底へ、ご両親の後を追って参りましょう。どうかお父親やお母親は、ぜうす様やまりあ様のお側へお出でなすって下さいまし。その代りおん教を捨てた上は、わたしも生きてはおられませんー。」

おぎんのこの言葉の後に展開する物語は、もはや単なる付足しに過ぎない。その娘の言葉を聞いてほろほろと涙を落とし出したじょあんなおすみの姿、そしてその妻を激しく叱りつけるじょあん孫七の言葉、「お前も悪魔に見入られたのか、天主のおん教を捨てたければ勝手にお前だけ捨てるがいい。おれは一人でも焼け死んで見せるぞ」しかし、彼の厳しい叱咤の声もまた、天使と悪魔との間にあって揺れ動く彼の気持ちも、おぎんの言葉の前に消えてしまうのである。

「お父親！いんへるのへ参りましょう。お母親も、わたしも、あちらのお父親もお母親もーみんな悪魔にさらわれましょう。」

つまりじょあん孫七は転んだのである。この物語の終わりには、この頃の芥川の他の作品が大旨そうであるように、作者自身の感想文が付加えられている。

「この話はわが国に多かった奉教人の受難のうちでも、最も恥ずべき躓きとして、後代に伝えられた物語である。何でも彼らが三人ながら、おん教を捨てるとなった時には、天主の何たるかをわきまえない見物の老若男女さえも、ことごとく彼らを憎んだという。これは折角の火炙りも何も、見そこなった遺恨だったかも知れない。」

以上が作品「おぎん」の大体の粗筋であるが、引用したおぎんの言葉と最後の芥川の意見に注目したい。この作品に於けるテーマは、「永遠に超えんとするもの」への芥川の懐疑である。作者自身の心の奥に巣くっているこの疑問を体現させるために農夫の養女、童女のおぎんほど相応しいものはない。おぎんは無知なる一少女である事により、「西方の人」のキリストのような「永遠に超えんとするもの」に至らんとする努力から逃れているのである。

芥川の芸術的情熱への尊重の気持ち、「永遠に超えんとするもの」への共感が書かせたものが「西方の人」であるなら、「おぎん」は彼の生活者としての立場、平凡な日常生活を守っていきたいとする気持ちが書かせたものである。おぎんの棄教という行為に対する作者自身の見解、「無性に喜ぶほど、悪魔の成功だったかどうか、作者はなはだ懐疑的で

ある」という最後の言葉は、芥川の「永遠に守らんとするもの」への共感を示していて余り有ると言える。

そして「おぎん」に於いても先の笹淵友一の指摘「永遠に超えんとするものを離れた地上の生活に平和がある」という言葉が十分にその意味を持ってくるのである。具体的には芥川は、「永遠に超えんとするもの」を離れたおぎんの姿を、幸福に満ちた輝かしいものとして次のように描写している。「おぎんは顔を挙げた。しかも涙に溢れた眼には、不思議な光りを宿しながら、じっと彼を見守っている。この眼の奥に閃いているのは、無邪気な童女の心ばかりではない。『流人となれるえわの子供』、あらゆる人間の心である。」

この場合の、「不思議な光」「流人となれるえわの子供」「人間の心」といった言葉がすべて地上の幸福に結付くものである事は当然である。

このように農村に生きる童女を主人公として取上げる事によって、日常生活に於ける幸福を描き尽くした芥川は、同じ主題を同じような題材によって他にも書いている。「南京の基督」がそれであり、この小説に於いても主題となっているのは、一人の無知なる一少女の誤解から生じた幸福である。彼女の前に横たわる真実は、彼女の幸福を打砕くだけの十分な力を持っているが、しかし疑う事を知らない彼女の無知がそうした冷酷な真実に勝ってしまう。一少女のささやかな幸福を奪い取る事の出来るものは存在しないのだという作者の態度には、「永遠に守らんとするもの」への絶対的な信頼がある。

「『そうかい。それは不思議だな。だが－だがお前は、その後一度も煩わないかい。』『ええ、一度も。』金花は西瓜の種を噛りながら、晴れ晴れと顔を輝かせて、少しもためらわずに返事をした。」

「南京の基督」の最後をこのような言葉で結んだ芥川にとってこの時期、地上の生活の幸福感は絶対的なものであった。この頃の芥川の小説は、彼が日頃から抱いていた人生に対する幸福感を裏付けるものであり、「永遠に守らんとするもの」に対する変わる事のない愛着を示すものである。こうした愛着が最晩年に至るまで持続したことが「西方の人」の構造を一層複雑化した事は事実であろう。創作活動に従事する以前から「永遠に超えんとするもの」を求めて止まなかった芸術家芥川にとって、平和に満ちた幸福な地上の生活は、無視し難い、あまりにも大きな課題であった。

晩年に於いても「永遠に守らんとするもの」への愛着を捨てる事の出来なかった芥川の気持ちは、「侏儒の言葉」の次のような文章がよく表現している。

「人生を幸福にするためには、日常の瑣事を愛さなければならぬ。雲の光り、竹の戦き、群雀の声、行人の顔－あらゆる日常の瑣事のうちに無上の甘露味を感じなければならぬ」「彼の幸福は彼自身の教養のないことに在している。」

最後に「西方の人」に於ける「天上から地上へ登る」という問題の箇所をどうするかという問題であるが、やはり作者の無意識の意志を尊重して芥川直筆の原稿のままにしておく事が、一番妥当のように思える。いわゆる心理学の分野に於いては、失錯行為（Fehlleistung）という一分野もある通り、理論的にもおかしいと思える箇所といえども、後代の人間がその誤りを正す（本文を訂正する）という行為は、作者の無意識裡の意思を踏みにじる事にもなりかねないからである。言い違い（Versprechen）、読み違い（Verlesen）、聞き違い（Verhören）、あらゆる失錯行為の様式や形式に就いて、ある種の意味のある事を論証しようとする努力が成されている現代に於いては、そのままの形にして放置する事にもある種の積極的

な意思があると思えるからである。

3、「西方の人」の評価

笹淵友一によって為された「西方の人」研究に就いては、既に多くを取上げてその主要な箇所に就いても見てきた訳であるが、「西方の人」研究に於いては先駆的な役割を果たした笹淵の論を受けて、その後昭和四十年代に入ってから時代の激しい動きもあって、「西方の人」をめぐる見解には目まぐるしいものがある。

その多くは「西方の人」研究ではなくて、「西方の人」を解釈してそれによって芥川像を求めようとした単なる批評文に過ぎない場合が多い。その意味では、笹淵が示した「西方の人」本文に即した実証的研究とは、多くその視点を異にしているわけであるが、しかしその中には今まで見られなかった斬新な見解もある。

いわゆる本文に囚われる事なく、自由に気の向くままにその意見を呈示する事の出来るのが、批評の長所であり短所である。常に実証的裏付けを必要とする研究にあっては見る事の出来ない、独創的な意見が文芸評論に於いては時々見られる。無論、この点が文芸評論が実証的研究に勝っている唯一の点であるが。

（1）佐藤泰正

ところで今日の「西方の人」評価を巡って、種々雑多な見解の先導的な役割を果たしたのは、既に取上げた論文であるが、佐藤泰正「芥川龍之介管見―近代日本文学とキリスト教に関する一試論」（「国文学研究」）早大文学、第24集）である。

佐藤泰正がこの論の中に於いて最初に取上げているのは、「天上から地上へ登る」という芥川の本文である。極めて問題の多いこの箇所に就いて、芥川の地上から天上へ」の脱出とその結果としての芥川の地上復帰、すなわち「天上から地上へ」の敗退として捉える事によって、芥川の挫折の意識を求めている。またそれと同時、このような脱却を試みる事の無かった自然人志賀直哉、芥川自身終生憧れて止まなかった人物を批評している。脱出を試み、その結果として敗退した芥川は、その挫折の意識の故に後世の者に対して志賀直哉の示し得なかった新しい課題と可能性を示し得たというのである。この意識は、後で取り上げる磯田光一の芥川論に通じている。

続いて問題視されているのは「クリストは死力を揮いながら、そこに彼自身とも―彼自身の聖霊とも戦おうとした」という一節と、「彼は母のマリアよりも父の聖霊の支配を受けていた。彼の十字架の上の悲劇は実にそこに在している」という一節である。「聖霊とも戦おうとした」キリストの姿は、そのまま「永遠に超えんとするもの」を斥けようとするキリストに通じる。

彼をしてより高度なものへ引きて登らしめんとするものを拒否するキリストは、「天上から地上へ」の敗退の道を歩んでいたというのである。このキリスト像が「聖霊の支配を受けていた」キリスト像と一致していない事から、芥川内部に於ける自己矛盾、自我の分裂の指摘が成されている。そしてこの芥川内部に於ける分裂を究明せず、彼の精神の痛みを自覚せずに、近代日本文学の解明はなされないとしている訳であるが、こうした究明は何一つ論理性を持たない訳であるが、なかなか鋭い指摘である。

さらに芥川の悲劇を、出身コンプレックスを知力によって補おうとした事に失敗した結果である、と捉えた吉本隆明の論（「芸術的抵抗と挫折」未来社）を批判し、芥川自殺の理由は「天上から地上へ」という言葉の中に含まれているとしている。では具体的にその理由は何か、その部分に就いて佐藤泰正は次のように述べている。

「『芥川の自殺を促進させ」たものがあるとするならば－『天上から地上へ』という新しい視程のなかに、彼がのぞきみた深淵の底にあるものだ。それは名づけがたい『何か』であった。」

読めば分かる通り、佐藤泰正はその理由を全く示す事なく、ただ漠然と「何か」という言葉 を記したに過ぎない。吉本隆明の論を激しく否定し、読者を引き付けておきながら、結局自分では何も具体的な事は示さずに擦抜けている。こうした無責任な論の展開は、文芸評論だけに許された自由というふうに解する事が出来よう。

芥川の覗き見た深淵の底にある「何か」が一体具体的には、何を意味しているか全く示す事なく、佐藤は芥川の「幼児性」が「世間知」との対立関係に於いて際立つ事になり、具体的にはそれらが彼の童話や詩の中に見られると指摘している。

こうして方向転換をする事によって、深淵の底にある「何か」に対する追求の道を閉ざしてしまった佐藤は、その芥川論を次のような文章で終わりにしている。

「芥川の死は『時代的な死』でもなく『文学的自然死』でもない。そこには未だに解決されない『何か』がかくされている。彼がこの不毛な風土の裡に予感した『何か』を、その断きられた可能性を－我々は更に深く探ってゆく必要があろう。」

この鋭い直感に富んだ評論に於いて、最終的に佐藤が示したのは、「幼な子」と「世間知」という対立が、そのまま「西方の人」に於ける根本的モチーフである「永遠に超えんとするもの」と「永遠に守らんとするもの」のテーマに通じているという指摘だけである。他にも「天上から地上へ登る」という一語に注目せよという指摘もあるが、これは単なる指摘に止まっており、最後までこの一語に対する佐藤の最終的な見解は聞かれなかった。芥川に関する数多い論文の中にあっても、かなり有名な佐藤のこの「西方の人」論は、何一つ論理性を持たず、その指摘は単なる思いつきに止まっているわけであるが、しかし実証性を持たない故であろうか、佐藤のこの論文に於いてはいくつかの暗示的な言葉が見出される。それゆえにこの論文が、近代日本文学とキリスト教という研究領域に於いては、先駆的役割を果たしたと言われるのであろう。最後に「その断ちきられた可能性」という「西方の人」に関しての佐藤の提言は、無視し難い。

「西方の人」に於いて取り扱われたテーマ、芥川の祈りに近い言葉は、無視され顧みられる事なく年月は過去り、「西方の人」に込めた芥川の言葉が再び聞こえるようになったのは、昭和も四十年代に入ってからである。芥川の「西方の人」の中に示した一つの可能性は、彼の死後四十年後にようやく小川国夫や遠藤周作などの現代作家によって再現されるようになった。

佐藤泰正が特別に注意を払った「天上から地上へ登る」という一節が、芥川の不注意による誤植であるという考えに就いては既に述べたが、この笹淵友一の誤植説を無視して、「天上から地上へ登る」という一節に芥川の精神内部に於ける秘められた思いを見ようとするのが、梶木剛「芥川龍之介の位相をめぐって」（「試行」第27号、昭和44・3）である。そして梶木剛の一連の芥川論（「試行」第23号、昭和42…第29号、昭和45）の中に於いても、取分け光を放っているのが、「芥川龍之介のなかの知識人と大衆」である。

この論文に就いては、既に取り上げているので詳しくはここに於いて述べるつもりはないが、全体として言えば梶木剛の芥川論は、磯田光一の芥川論を下敷きにして、それをより広範囲に適用したもののようである。この事に就いては、梶木剛自身の言葉が証明しているであろう。

「何が光る部分かと言えば、マリアが『庶民的現実の象徴』であり、クリ

ストは『そういう現実に飽き足らない人間の一側面の象徴』であるとみる『西方の人』の読み方があり、そこから、芥川を、その二律背反に身悶えて生きた人間として把握していることがそうである。これは鋭い洞察に繁がっているもので、わたくしの考え方もそれに近いといってよい。」

「わたくしの考え方もそれに近い」は失笑である。時期的にもずっと後になって出来た論文が、その下地になったものに近くなるのは当然である。梶木剛の成した「西方の人」に於ける三つの指摘、「マリア＝自然」「聖霊＝知識」「クリスト＝知識に懇かれた人間の象徴」は、磯田光一による指摘、「マリア＝庶民的現実の象徴」「聖霊＝人間の精神的志向」「クリスト＝現実に飽き足りない人間の一側面の象徴」から導出して来た見解である事は紛れもなく、実証的な裏付けというものを持たない評論に於いては、その提示した見解がどれほど独特なものであっても、それが二番煎じであるという事に於いて、その価値が半減してしまうようである。

（2）磯田光一

妙に観念だけが空回りしていて、直観の冴えのみられない梶木剛の一連の芥川論から比べると磯田光一の「芥川龍之介と昭和文学」は、鋭い直観によって「西方の人」の本質を見抜いていると言えるだろう。既に引用した「マリア」「聖霊」「クリスト」をどのように捉えるか、という問題から始まり、芥川論の最初に述べられた、結論的な次のような言葉も十分に納得いくように説明されているのである。

「私は『西方の人』を読むたびに、それが大正文学への訣別の言葉であったと共に、昭和文学の運命への予言であったという思いを禁じえない。晩年の芥川の耐えていたもの、それは大正文学の崩壊の予感であると同時に、昭和文学の迫るであろう運命への祝福と警告の思いではなかったであろうか。」

この最初の言葉で分かるとおり、この芥川論は、一人の近代作家を現代に呼び戻そう、大正時代の一作家に今日的意味を与えようとしたものであるが、結果的にはこの試みは成功したといえるであろう。

第一に「西方の人」は、芥川以後の昭和文学（戦前）への決定的な予言の書となっているというのである。問題にされているのは、（17「背解者」）と（23「ラザロ」）の二つの章であるが、この二つの章に於いて描かれているキリストは、「西方の人」全体の中でもかなり独特なものであり、そこに抱くイメージは人によってかなり違うものである。マリアの存在を無視して、己の意思を通そうとする天才的利己主義者キリストの姿に、磯田光一は家庭を犠牲にして芸術への道を歩んだ私小説の作家（葛西善蔵、嘉村礒多等）や、実生活を犠牲にして理想のために生きた左翼文学者（小林多喜二等）の姿を見ているのである。

このような「西方の人」の理解の上に立っている磯田光一にとって、新感覚派の文字は、「聖霊」への不信と「マリア」的世界に対する崩壊の危機を持ったものとして捉えられているのである。こうした考えに基づく磯田にとっては横光利一の日本回帰が、失った「聖霊」を再び得ることにより、「マリア」のもとに戻ろうとするものである、と映るのもまた当然の事と言わなくてはならないだろう。

磯田光一の「西方の人」の適用は、昭和文学それだけではなくて、戦後文学にまで及んでいるのである。彼によれば戦後の社会は、農地改革と民法改正によって、「マリア」的世界の変貌と「マリア」自身の「涙の谷」からの解放がなされたものであるとしている。相当に強引な図式化ではあるが、「西方の人」に今日的意味を与え、現代に蘇らせた功績は十分に評価されてもよいように思われる。しかしながら次のような指

摘に至っては、いささか独断が過ぎるようだ。

「肉体だけ逞しい兵卒たちはクリストに茨の冠をかむらせ、紫の袍をまとわせた上『ユダヤの王安かれ』と叫んだりした。クリストの悲劇はこう云う喜劇のただ中にあるだけにみじめである。

『肉体だけ逞しい兵卒』にいかなる暗喩を読むかは、人によって異なるであろう。いったいこの『肉体だけ逞しい兵卒』は、はたしてキリストの時代だけに固有な存在であっただろうか。『戦後』とは『肉体だけ逞しい兵卒』たちの時代ではなかったであろうか。」

戦後を「肉体だけ逞しい兵卒」たちの時代と見るのは、明らかに「殉教の美学」によって三島由紀夫の精神主義への傾向を示した、磯田光一ならではのものであるが、果たして戦後という時代は、真実「肉体だけ逞しい兵卒」たちのものであったか、本当に戦後という社会は物質主義への憧れだけの時代であったか。

戦後という時代にあって、精神の基盤を失い、民主主義に対する限り無い憎しみを抱いたのは、三島由紀夫という一作家に於ける個人的な問題ではなかったか。兵卒たちの尋問や嘲笑に対して答える必要を認めなかったキリストの姿は、そのまま私小説の作家達への芥川の態度を意味しない。現実の社会を成立させているのは、「サドカイの徒」であり、「パリタイの徒」であり、また「兵卒たち」であると捉えた時、キリストの沈黙に芥川の現実社会への断念の気持ちを認めようとした時、既に磯田光一は、芥川の「西方の人」を大きく超えてしまったように見受けられる。どうやら彼は、三島由紀夫によって示された、戦後社会の空洞化に対する不満を、「西方の人」の内部にその解決の道を求めようとしたようである。社会を構成しているのが「マリア」的世界に住むものであるという事は、いつの世でも変わる事のない事実である。戦後社会のみ取分けて、「兵卒たち」の社会と規定する事実はどこにも存在していないのである。

もし磯田光一の芥川論の中に大きな意義を見出すとするならば、打ち捨てられた過去の作品「西方の人」に対して、斬新な今日的見解を与えた事であり、昭和初年の芥川の遺稿となった作品に新たな角度から光を当てる事によって現代に蘇らせた事であろう。

（3）駒尺喜美

芥川死後、破滅に向かっていた日本の運命と戦後の動乱期という特殊な歴史がようやく一段落つきながらも、しかし一方に於いては国内の政治の動きは止まる事はなかったので、予言の書としての「西方の人」に就いての解釈は実に様々である。

その主張、その解釈も、それぞれの人が置かれている立場や地位などによって変わるわけであるが、「西方の人」を芥川の最後の主張であり、自己顕彰であると言っているのは、駒尺喜美である。（「芥川龍之介の世界」法政大学出版局）

それによれば、芥川は絶対美を目指したという優越感と、実生活に敗れたという劣等意識の矛盾に苦しみながら結果的には、敗北意識を自覚した自意識の世界にあっては、敗北意識を優越感として受け止めていたというのである。従って彼が自分の事を「阿呆」と読んだ時、そこには実生活に失敗した「阿呆」という意味があるわけであるが、それと同時に、「阿呆」と自覚している者としての自尊心も含まれているというのである。この指摘は十分納得し得るものである。

我々は、芥川が敗北して自殺した事は知っていながら、決して彼を敗北者としては見ていないからである。芥川自身も、自分の人生は失敗で

あったといい、人生の敗残者であると告白し、また他者も表面的にはそれを認めているわけであるが、実際はそうではない。後代のあらゆる人々が、芥川に勝れた作家としての尊敬の視線を投掛けている理由は、芥川の敗北の告白の中に強い逆説的自己主張があるからで、真実「阿呆」であったと思っていた人物に対して世間の評価は、それほど高くなるはずがないからである。このように見てくると芥川の敗北意識の中には、他に比する事も出来ないほどの激しい自尊心、傲慢さにも通じる芸術家意識があった事が分る。

駒尺喜美によれば「西方の人」と「或阿呆の一生」とは、それぞれ表裡一体の関係にあり、「西方の人」は「或阿呆の一生」に於いて示された表面的な敗北意識を十分に打倒するだけの役割を果たしているというのである。従って駒尺喜美の示した芥川像によれば、「天上から地上へ登る」などという考えはとんでもない事になるはずである。虚無的な側面を持つ一方に於いて彼が目指したものは、あくまでも「永遠に超えんとするもの」、絶対的な世界であったとするのである。

駒尺喜美の指摘の中に於いて特に注目されるのは、芥川の絶対希求という事の他に、虚無的哲学の影響という事がある。

芥川は年少の頃から厭世主義の哲学をまだ一頁も読まぬ前にすでに厭世主義者だった」（「大導寺信輔の半生」）という言葉も見られるが、これはおそらくは芥川の気取りであろう。しかし同じ箇所で、厭世主義哲学が「精神的流行病」であったと言っているので、彼が当時流行っていた超人思想や虚無思想の影響を受けたのであろうと思われる。

（4）中村完

このように作品についての種々の解釈がなされると、やがて「西方の人」の読み方、理解の仕方だけではなくて、芥川作品の中に於ける位置を極めよう、あるいは素材の追求なども成されるようになり、「西方の人」の評価をめぐる内容追求から、より微細な問題へと展開するようになってくるのである。

こうした雰囲気の中にあって注目されるのは、中村完「西方の人」論である。（「批評と研究、芥川龍之介」所収、芳賀書店）この作品論の新しさは、簡単に要約すると芥川文学全体の中に於いて「西方の人」を位置づけようとした事である。芥川の悲劇は、自由勝手な西洋文化への想像の上にキリストの悲劇を設定している事、つまり「西洋」へのひたむきな想像と期待の内に介在するという中村完の指摘が、彼の「西方の人」論の骨組みになっている。従って「西方の人」の悲劇はキリストの悲劇ではなく、軟弱な思想風土の上に近代精神を植えるべく奮闘して挫折した芥川の個人的な無念の思いとして理解されている。このように芥川を捉える中村完の最初の指摘は、「大導寺信輔の半生」の考察によるものであり、それは芥川が人生の途上にて息詰まり、原点へ回帰を試みた時、そのように幼年時代を回顧するような、自己の精神の弱い部分を消しさるに必要な回帰すべき激しい青春時代というものを芥川は経験する事が出来なかったというのである。

彼が生きた時代にもまた、激烈な青春というものは存在しなかった。同じような息詰まりを経験しながら、漱石のように芥川が生きられなかった理由には、時代的なものが多分に影響しているであろう、という見解には確かなものがある。

具体的には「地獄変」「泰教人の死」などの主人公の姿を最後まで冷ややかに傍観する精神に欠けていたという指摘や、「藪の中」の女の業のように、秘密を「永遠にまもらんとする」態度の延長線上に、母のイ

メージを媒介として浄化された「西方の人」のマリアの姿があるという指摘などは新しい。

さらにこれは多く言われている事ではあるが、傍観者ではなくて参加者の立場から筆を執ろうとしたのが、「一塊の土」であり、「玄鶴山房」であるというのである。

「芥川の『西方の人』は、文学史的にあきらかに、一つの時代の凝縮された到達点であり、同時に、未来にひろがっていく一つの起点であったといえよう。」という結論と、芥川以後の作家横光利一、川端康成、堀辰雄、中野重治らの活動は、全て何らかの形で芥川の「西方の人」を起点としているといった意味の発言など、なかなか興味深い箇所である。しかし一方に於いて文芸評論特有の意味不明、あるいは暗示だけで与える文章も相当ある。「共感を拒否するその及びがたい人間像に『他人』をみることからはじまる、自己の内部にその『他人』を育てる機会を不用意にのがしてしまったことである。」

「非常の手段によって、自由な散文構成のなかに『私』をときはなとうとしたこころみの最後のそれが、『西方の人』と『続西方の人』であった。」

この箇所に於いて中村完の主張しようとしたところは、おそらくは次のような意味であろう。『他人』を完全に『他人』として見てきた芥川が、『他人』を傍観的位置から見られなくなった、ここに芥川文学の破綻が生じた訳であるが、最後の作品「西方の人」「続西方の人」は、客観的立場に立つ事により、その破綻をまぬがれている。中村完の文章は、全体的に一見難解な、実際は余り意味をなさない文章からできている。ところでこの「西方の人」再評価の論を書いた佐藤泰正は、再度「西方の人」論を書いて（「国語と国文学」昭和45・2）、十年後も変わる事のない芥川に対する執着を示している。芥川の「西方の人」執筆時に於ける視点を改めて問い直したいとする佐藤は、実社会から阻止されている「聖霊の子」の運命とその「聖霊の子」であるキリストに阻害された「マリア」の運命とを同一視、この二つを表現するのに「美しい」としていて、「マリア」に対して全く同一の叙情性を抱いているというのである。

「永遠に超えんとするもの」を求めて止まない「聖霊の子どもたち」は、その激しい天上世界への志向の故に、地道な地上の実生活から疎外され、一方に於いては平凡な日常生活を送っている「マリア」が、その平凡さ故に、天上世界を志向しているキリストによって疎外されているという指摘、さらにこの両方の疎外されたものに対して芥川の視線は暖かいと言っている。

さらに佐藤泰正は、「西方の人」の本文中の問題の箇所「天上から地上へ登る」に就いて、この発想の元になった素材を二つ指摘している。（「ヤコブの夢」旧訳聖書創世記第28・10以下）

評論特有のいくつかの問題点を持ちながら佐藤泰正の「西方の人」論には、十年前のものが持っていなかったある種の深みが見られる。

（5）鈴木秀子

以上「西方の人」の種々の見解に就いて見てきたが、最後に「西方の人」執筆に際して芥川の作品創作上の素材となった作家、あるいは作品論を一つ見ておきたい。

それは鈴木秀子「芥川龍之介とキリスト教ー西方の人を中心としてー」（「聖心女子大学論叢」昭和42・12）である。

今まで取り上げた「西方の人」論の多くが、評論の形を取っていたの

に対して、この「西方の人」論は、研究論文の形を取っている。その内容は地味ではあるが、一つ一つの指摘に着実な実証を行っている事が注目される。芥川が「西方の人」の最初の章の題に取った、「この人を見よ」という言葉の究明から論文が始まっている訳であるが、血まみれになって苦しんでいるキリスト浴びせられた総督ピラトのこの言葉が、どのような状況下に於いて投げ掛けられたかを知るためにヨハネ福音書からの一頁もの引用が成されている。

決定的な瞬間に於けるこの一語は、幾世紀もの間西洋画家の素材になり、ニーチェの本の名前にもなっていて現代に残っている訳であるが、しかし芥川はこの一語を先人たちの残した書名からとったのではなくて、聖書から直接採用したという指摘は耳新しい。しかし残念ながらその証拠は示されていない。

「西方の人」が「この人を見よ」と呼掛けた、ピラトへの後代の芥川の返答である、という指摘も興味深い。本文中の「わたしのクリストを記すのである」という、作者の断りがきもそう考えると辻褄があう。

「西方の人」の最後の章に至までキリストの姿は、芥川の意識を離れなかった。しかし作者の視線は、しばしばキリストではなくてマリアの方に注がれている。芥川にとって何故それほどにマリアは大きな位置を占めたのであろうか、という疑問にも回答がなされている。

芥川がそのキリスト教観を得たと言われているルナンの「イエス伝」にも、また聖書そのものの中に於いてさえもマリアの名を見出す事は稀である。実母の発狂によって、母の喪失を体験した芥川にとって母の存在は、幼児から大きな関心事であった。長崎の「大浦天主堂」に対して全く無意識に「日本の聖母の寺」（「長崎日記」昭和2・5・2）という名称を与えた彼であった。神父との雑談やお祈りを見聞したり体験したりしながら、彼は全く彼自身の感覚によってカトリックそのものを母的イメージの中に捉えたのであった。このような彼の内部のマリアのイメージが、後になって「永遠に守らんとするもの」という芥川独自のモテーフに発展していった事は無論である。

芥川によって示されたマリア像があまりに日本的、つまり俗的である事に就いても聖書を理解せず神の存在を信じてなかった芥川にあっては当然であろうという意見が多く出されている。キリストをジャーナリストとして理解した芥川にとっては、キリストよりもマリアの方が自分に近い存在であった事は確かで、彼は「西方の人」の中にあってより多くの親しみをマリアに与えている。天上を求めて止まないキリストの生き方に対して、芸術家としての彼は常に同感の意を示していたが、しかしそれと同程度に彼の視線はマリアに向かって注がれていた。

芥川の目に映じたマリアはいつも、苦難に満ちた道を一人で歩いているただの女人だった。こういうマリアを彼は「涙の谷の中に通っていた」という言葉で表現している。この「涙の谷」という言葉を「苦悩に満ちた現世」の意味で彼は、既に早くから使っていた。

「かばかりに苦しきものと今か知る『涙の谷』をふみまどふこと」（「藤岡蔵六宛書簡」大正4・3・9）またこの友人宛てに送った十二首の歌の中には、次のようなものが見られ、芥川がこの頃から聖書に親しんでいた事が知られる。「わが心ややなごみたるのちにして詩篇をよむは涙ぐましも」

しかし鈴木秀子が指摘している「旧約聖書、詩篇」（84・7）に「涙の谷」を意味する巡礼の歌が見られるというのは、「旧約聖書、詩篇」（84・6）の誤りであり、さらに鈴木は自分の指摘した箇所に「涙の谷」の語が見付からないので、「涙の谷」というのは芥川の造語ではないか、

として次のように結論づけているが、これも誤りである。（おそらくは鈴木は、「口語訳聖書」を使ったのであろう。「文語訳聖書」には「涙の谷」の語が存在している。）

「従って、『涙の谷』という語を芥川が好んで使ったのは、旧約聖書の詩篇から学んだものではなく、むしろその言葉の意味によったものである。」

「旧約聖書、詩篇」（84・6）は次のように明らかに「涙の谷」の語を記している。「かれらは涙の谷をすぐれども其處をおほくの泉あるところとなす」

鈴木秀子の「西方の人」論は、こうしたいくつかの誤りがあり、あまり感心しないが、一方に於いてはいくつかの示唆される指摘もある。

若き日に「大川の水」の流れに自己の死を見詰めた芥川が、年を経るに従って意識して視線を死に固定すると同時に、心の中に於いてキリストを求め続けるようになっても「クリストは今日のわたしには行路の人のように見ることはできない」とか、あるいはまた「まざまざとわたしに呼びかけているクリストの姿を感じる」という告白をなすに至るまでには、もう一つの時期、殉教者たちへの興味を抱いていた時期が必要であったという指摘など注目したい。この場合の殉教者達に対して興味を持った時期にあっても、彼の意識が、殉教という行為そのものに向かっていた訳ではない。死の不安に捉われた若き日ー殉教者達への共感ー「西方の人」の告白、というふうに芥川の精神を図式化し、少しづつ信仰者のそれに近づいていくものとし理解しようとしたら、これほど大きな誤りはないであろう。殉教者の行為の一つ一つは、人生の充実した瞬間を生きたことの出来た者として、創作者である芥川の精神に訴えたにすぎず、「西方の人」に至っても果たして芥川がどの程度信仰に近づいたかは、はなはだ疑問と言わなければならないからである。芥川にとって殉教の行為は、単なる文学作品の素材でしかなかった。殉教者（「奉教人の死」の主人公）は、芥川が死ぬまで持ち続けていた彼自身の宗教、つまり「刹那の感動」に多少とも訴えたに過ぎないのである。この様な芥川と殉教者との関係を全く無視して、佐古純一郎は次のような見解を述べている。

「なぜ芥川は、殉教者のすがたのなかにそれほど心をひかれたのであろうか。私は思うのだが、殉教ということがらのなかに、人間の死のもっとも美しいかたちを見たからである。殉教とは？それは、人間がキリストの真理の前に、自己を捧げつくすことであるが、そこには、エゴイズムを完全に超越した人間の姿があるわけである。」

この種の文章は、キリスト教宣伝のためには有効であろうが、芥川論としては全く意味をなさない。研究者の中にはこのように作家を通して自己を語り過ぎる、というよりもむしろ研究対象である作家の事を無視して、自己だけを語っている人もいる。このような単純な見解に拠って一つの文学を切断するのは、キリスト者に与えられた特権であろうか。いくつかの鋭い見解を持ちながらも鈴木秀子も時としては、次のような芥川文学とはあまりに懸け離れた意見も述べている。

「キリストは人の心とキリストとの縦の結びつきのうちにみずからを示されるが、同時に、人々の横との連帯、すなわち教会という人々の共同体のうちにもみずからも証明されるのである。キリストの証明をたてる教会という共同体で真のキリストを知りえなかった芥川が『キリストはこういうものだ』と宣言する多くは西欧の反キリスト教的思想の影響を受けた彼の独断となり、キリストとは無縁のものになってしまった。」

この種の意見を堂々と芥川論の中に於いて述べているキリスト者達は、芥川の次の言葉をどのように聞くであろうか。

「阿呆たちは彼（キリスト、筆者注）を殺した後、世界中に大きい寺院を建てている。が、我々はそれらの寺院にやはり彼の歎声を感ずるであろう。『どうしてお前たちはわからないか？』」（「続西方の人」15）キリスト者達の勝手気ままな芥川論が述べられるごとに、芥川自身の歎声が「続西方の人」の中から聞こえて来るようである。「どうしてお前たちはわからないか？」と。

こうした問題の箇所を随所に持ちながら、鈴木秀子のこの論文には、印象深い捨て難い箇所もある。

「芥川龍之介は、キリスト教観をルナンから、その表現をワイルドから受け聖書の一行一行を忠実にたどりながら、『わたしのクリスト』を書いてゆく。』

この意見を述べた鈴木秀子も、残念な事にルナンあるいはワイルドの本文を引用して芥川の「西方の人」との比較検討という方法はとっていない。従ってこの意見が意見がどの程度実証的裏付けを持ったものであるか、我々は知る事が出来ない。

4、「続西方の人」

芥川がその生涯に於ける総決算を目的として書残した、「西方の人」に就いては既に多くを論じたが、しかし「西方の人」論だけでは、全ての意を尽くしたとは言切れない。その事に就いては芥川自身が、次のように述べているからである。

「わたしはわたしのクリストを描き、雑誌の締め切り日の迫った為にペンを抛たなければならなかった。今は多少の閑のある為にもう一度わたしのクリストを描き加へたいと思っている。」（「続西方の人」）

「西方の人」に就いては全てを言尽したと思っていても、芥川自身が、「もう一度わたしのクリストを描き加えたい」と言うからには、わたしも再びペンを取って「続西方の人」論を書かねばならない。

「西方の人」から「続西方の人」へ芥川の意図したものは何か、それに就いての見解は、既に定まっている。それは鈴木秀子の「続西方の人」論に代表されるように一語で言えば「母なるものへの傾斜」という事である。つまり多くの人々は、芥川がその苦しさに耐えかねて天上志向を断念して、「炉辺の幸福」への親しみを深めたと見ているのであるが、果たしてそうであろうか。誰にとっても、大衆への限り無い侮辱の念を抱いて芸術への道を歩み続けた者が、死の瞬間までその考えを変える事なく死んでゆき、死の直前の思いが、自分達をも含めた一般大衆への限り無い絶望であったとしては、生残った者は耐え難い。無責任に死んでいった者の意思によって少しでも後に残った者が、影響を受けるという不都合を避けるために、人々は死者に対して自由な解釈をしたがるものである。死者に対しては、そうした自由が確かに許されるに違いない。それは生残った者に許されている権利のようなものである。しかしその対象が死者そのものではなく、死者の遺した作品であった場合、そうした御都合主義の曖昧な態度は許されてはならないはずである。真の作品論は、その作品に込められたその作者の意思を出来得る限り正確に把握する事から出発しなければならない。

「続西方の人」に於いても、芥川にとってはキリストが彼の芸術的精神を具現するものであり、マリアが平和な日常生活を意味している事は変わらない。芥川がその最初の章を「再びこの人を見よ」で始めているのは、象徴的であり、また決定的な事であった。芥川は最初からそもそ

もマリアの事など考えてはいないのである。彼の頭の中にあるのは、最初から最後まで常に変わる事のない、より高いものを求めて止まぬキリストの姿であった。「続西方の人」のどこを読んでも、我々は芥川によって描かれたこうしたキリストの姿を見出す事であろう。試みに全作品中から、マリア的世界を拒絶している、あるいはマリア的世界から拒絶されているキリストの姿が描かれている箇所を取り出してみよう。殆ど引用し難いほどの夥しい数になるはずである。

これからの長い気の遠くなるような人生を、不本意なまま生きねばならぬからといって、自殺への勇気に欠けるからといって、限りない絶望を抱いたまま死んで行った芥川の意思を生者の都合によって変えるわけにはいかない。論者の人生観に裏付けされた、勝手気ままな「続西方の人」論を阻止しなければならない。

「西方の人」「続西方の人」に就いての正確な理解を妨げているのは、芥川自身にもその理由を求められる。それは芥川が自ら、キリストに就いて「我々はこういう事実にもおのづから彼に柔い心臓のあったのを見出すであろう」と言っているごとくに、キリストの内部に弱者の一面を見出している事と関係している。確かに芥川のキリストは、その性格の側面にマリア的要素を持っている。芥川はキリストの内部にそうした人間的な側面を見出すことによって親しみを覚えた訳であるが、しかしキリスト＝マリアというようになるものではない。最期に至るまで芥川の求めたものが、マリア的なものを拒絶したキリストであった事を立証したい。

「永遠に超えんとするもの」の導くままに天上世界に至らんとするキリストの姿、あるいはまたそれに類した描写のある箇所は、全作品中夥しい箇所に及んでいる。無論、それらの記述には幾分の弱さを持った箇所も見出す事が、出来る訳であるが、それは「彼に柔い心臓のあったのを見出すであろう」という言葉が示すように、芥川が自己のキリストに対して人間的な暖かさを与えた結果である。下界の人生に懐かしさを覚えたり、あるいはまた大工の息子だった昔の事を考えたりするのは、キリストの人間的側面を表現しているにすぎない。「永遠に守らんとするもの」への回帰、「母なるものへの傾斜」などというものではないのである。

「続西方の人」は、紛れもなく最期の芥川の姿である。人は誰でもキリストの中に彼自身を発見するであろう。キリストの内部に自己を見出していると告白する芥川の心情は、真実のものである。それゆえにもし、芥川が「続西方の人」に於いて「母なるものへの傾斜」を示したならば、「続西方の人」の内部のキリストは、マリアのように「永遠に守らんとするもの」になっていなければならない。ところが「続西方の人」は、その全文脈に於いて徹底的に「永遠に守らんとするもの」から離れた存在であることを示している。その内訳を「続西方の人」の章によって示すと、「1、3、5、6、7、8、9、11、12、16、17、18、20、22」となり、これらの中に於いては直接にキリストが聖霊の子であること、「永遠に超えんとするもの」そのものである事を語っている箇所も少なくない。

無論、「続西方の人」の本文中にあっては、鈴木秀子の指摘にもあるように、多少ともマリア的要素を持ったキリストの描かれている場面を見出だす事も可能である。しかしその中のどの場面を見ても、天上世界を目指すキリストの心の中の、人間的優しさあるいは弱さといった程度の問題であり、絶対にキリスト自身の「母なるものへの傾斜」ではない。その場面を試みに全て引用して考えてみよう。引用は全部で五箇所であ

り、先の「永遠に超えんとするもの」に対して忠誠を誓うキリストの描写から比較すれば、その数は驚く程少ない。

（1）「マコの伝えたクリストは現実主義的に生き生きしている。われわれはそこにクリストと握手し、クリストを抱き－さらに多少の誇張さえすれば、クリストの髭の匂いを感じるであろう。」（2「彼の伝記作者」）

（2）「しかしクリストの無抵抗主義は何かさらに柔かである。静かに眠っている雪のように冷ややかではあっても柔らかである。」（4「無抵抗主義者」）

（3）「クリストは十字架にかかる前に彼の弟子たちの足をあらってやった。『ソロモンよりも大いなるも』をもってみずから任じていたクリストのこういう謙遜を示したのは我々を動かさずには措かないのである。それは彼の弟子たちに教訓を与えるためではない。彼も彼らと変わらない『人の子』だったことを感じたためにおのずからこういう所業をしたのであろう。」（11「ある時のクリスト」）

（4）「弟子たちの足さえ洗ってやったクリストはもちろんマリアの足もとにひれ伏したかったことであろう。」（11「ある時のクリスト」）

（5）「サドカイの徒やパリサイの徒はクリストよりも事実上不滅である。この事実を指摘したのは『進化論』の著者ダァウインだった。彼らは今後も地衣類のようにいつまでも地上に生存するであろう。」（16「サドカイの徒やパリサイの徒」）

まず（1）の引用に見られる部分、「マコの伝えたクリストは現実主義的に生き生きしている」という箇所に就いてであるが、確かに現実主義的に生きるのは、マリア的世界に生きる者の得意とするところであるが、しかしここに於けるキリストの現実主義は、そのような事を言っているのではない。

芥川は単に四人の伝記作家の中に於いて、ヨハネだけが一人他の三人と孤立しており、そのキリストの描写に於いて、著しい違いを見せている事を言いたかったにすぎないのであって、マコの伝えたキリストが現実主義的で生き生きしていると言うのは、芥川の聖書を読んだ後の単純な印象批評であり、それ以上の深い意味はないのである。

（2）に就いては、もともと強い意味は存在しない。「無抵抗主義者」の4章全体が、芥川のキリストに対する印象批評となっているからであろうか。

ペテロに向かっては、「鶏が鳴く前に、三度わたしを知らないと言うだろう。」（マタイ伝26・34）と言ったり、あるいはまたユダを指差して、「あなたがたのうちの一人が私を裏切ろうとしている」（マタイ伝26・21）と発言したキリストの心は、さぞかし冷たいものであったろう。しかしその冷えきったキリストの心を示すのに、トルストイを持ってきている事からも芥川の捉えたキリスト像は、それほど冷たいものではない。このようにキリストのニヒリズムを中途半端なものとして見ている芥川の気持ちは、「雪のように冷やかであっても柔かである」という言葉の中に、意が尽くされているであろうと。従って「冷ややかさ」と「軟かさ」という相反する二つの語から成っている、（2）の引用部分全体はそれほど重要な意味を持たない。

（3）あるいは（4）の、「弟子たちの足を洗ってやった」キリストの謙遜と、その謙遜の原因となったキリスト自身の「人の子」としての自覚の部分と、それに続く「平和に至る道は何びともクリストよりもマリアに学ばねばならぬ」という部分とは、その前後論理的に結びつかないように思えるが、続く「弟子たちの足でさえ洗ってやったクリストはもちろんマリアの足もとにひれ伏したかったことであろう。」という芥川

の解説に至って、全てが了解される。

芥川によれば、キリストは常に「永遠に超えんとするもの」の側にあって、「詩的正義」のために戦い続けた戦士であった。そういう強い意志に基づいて行動し続けたキリストも死の直前になって、既にこの多くを失っていた人間的側面を取戻した。少なくとも芥川自身は、そう考えたかったに違いあるまい。

確かにこの場面に於いてある者は、「母なるものへの傾斜」を見るかも知れない。しかし私自身は、キリストが死の直前に於いて他者に示した、意識的に自己を低くした彼の人間性というふうに考えておきたい。何故なら作者自らが、その直後に「お前たちはもう綺麗になった」（ヨハネ15・1…3）という高かきを求めて止まぬ、キリストの完全なる勝利を示す言葉を記しているからである。

（5）の引用は、言うまでもなくマリア的なものの不滅を断言した箇所であるが、これは必ずしも聖霊に導かれたものの衰退を意味しない。「サドカイの徒やパリサイの徒」の16章全体の文意は、強いて言うならば、芸術生活よりも日常生活の方が、その生存に於いては強者であるという事である。

以上多くの引用する事になったが、結局「続西方の人」を構成しているのは、「永遠に超えんとするもの」に忠誠を誓う聖霊の子としてのキリストの変わる事のない姿である。もし「続西方の人」の本文中にあって「母なるものへの傾斜」を思わせるものがあるとしたら、それはクリストを把握する芥川が、その精神に於いて、独歩と同じようにあまりに「軟らかい心臓」を持っていた結果であろう。

聖書の中のキリストを求める芥川の視線は、最初から最後まで徹頭徹尾、自己の精神生活の分身である、聖霊の子供であるキリストの上に注がれていたのである。このように見てくると芥川が、死の直前に於いても絶対に下界の人生に懐かしさを覚えなかった事が判明するはずである。彼の視線はいつも「天に近い山の上」の、しかも「氷のように澄んだ日の光の中」に注がれていたのである。

もし芥川の意思が、「深い谷の底」の「柘榴や無花果」の素晴らしさを称えているとしたーという事は、芥川が生を賛美していたらという事であるが、芥川自身の自殺は最大の自己矛盾という事になる。作者自身の自殺という厳然たる事実が、間違いもなく芥川の意思が「天に近い山の上」の「氷のように澄んだ日の光り」に向けられていた事を証明しているはずである。

「多感な少年の日に、母の喪失をいたましいかたちで経験した芥川が、母に呼びかけた戦場の兵士のように、死を前にして、心の底からクリストに託した叫び声は、母のイメージにつながるものではなかったろうか。『続西方の人』が、芥川の他の作品と質を異にすると私が考えるのは、『母なるものへの芥川の心情の傾斜』をこの作に読みとらずにはいられないからである。」（鈴木秀子「続西方の人」論）

上記の一文が、鈴木秀子の「西方の人」論の結論の部分であるが、しかしこの結論を導き出すための操作、いうなれば論理的追及が論文中に於いては、全くなされていないのである。従って、鈴木秀子が最後の芥川に対して、こうあって欲しいと願ったところの芥川像、「戦場の兵士のように」キリストに対して救いを求めたという芥川は、単に鈴木自身の観念の内部に生きている芥川であって、芥川龍之介の実体とは関係ない。この「続西方の人」論を終わるにあっては、私自身が強い不満を持った鈴木秀子の「続西方の人」論に対して、その内容を検討する事が必要であろう。鈴木は「西方の人」執筆直前の創作者としての芥川の精神状

態に就いて、次のように分析している。

（1）「作者自身が『続西方の人』の評価に就いて全く気にしていない。」

（2）「自分の好きな作品を書こうという気持ちだった。」

（3）「作者は自分の精神内部の『軟かい心臓』の鼓動を、『続西方の人』を介して人々に伝えたかった。」

（4）「キリストに向けられた芥川の態度の変化、あるいはマリアに向けられた作者の視線の変化」

（1）、（2）に就いては、芥川自身がこの種の意味の発言をしているので、別にこれといって問題はない。（「続西方の人」1再びこの人を見よ、「芸術その他」）

しかし（3）に就いてはどうであろうか、「独歩は鋭い頭脳を持っていた。同時に又柔らかい心臓を持っていた」（「文芸的な、余りに文芸的な」国木田独歩）という一節を全く唐突に取出してきて、「続西方の人」の精神内部を照らし出そうとしている。

さらに（4）に取り上げられているのは、キリストではなくて、マリアである。マリアを描く芥川の筆が、どれほど親しさに満ちていようとも、そのような事は関係ない。「続西方の人」は、キリストを描いたものであるから、マリアの位置がどれほど変わろうとも、キリストの中に変化を見出せない限り、「続西方の人」の主題に変化はないのである。

このような中途半端な論理というよりも暗示的意見の後で、突然次のようなテーゼを我々に示している。

「『続西方の人』が芥川の生涯の全作品とまったく異なるものとしてのアイデンティティをもつのは、『続西方の人』で初めて、芥川は、無意識のうちに、はげしく『母なるものへの傾斜』をしめしている点にある。」もし芥川が「母なるものへり傾斜」をしめしているなら、当然のこととして「続西方の人」の中のキリストもまた「永遠に守らんとするもの」に向かって回帰していなければならないはずである。しかるに「続西方の人」の本文中、いかなるところにもキリストの地上への帰還を意味する描写は見られない。鈴木秀子もこの事実を無意識裡に知ったのか、キリストの地上への帰還というような文章は差控えたようである。

鈴木は、自身が示したテーゼの根拠となるものをキリストの中に見出せなかった結果、その根拠を「西方の人」と「続西方の人」の両作品に於ける、マリアの描写の違いに求めている。確かに両作品に於ける、マリアを描く作者の視線は移動している。しかし再度断っておけば、マリアはいかに変化しようと飽くまでもマリアであり、キリストとはなりえない。さらに「続西方の人」にあってはマリアがいかに変わろうとも、その本質が「永遠に守らんとするもの」であることも断るまでもなかろう。

聖霊の意思を受入れてキリストを生んだマリアは、既にキリストの母であるという事実に於いて、その内部に「永遠に超えんとするもの」を内在させている、と説く鈴木秀子の考えは確かに独創的ではあるが、論理的考証の裏付けを持たない故に、芥川の操作によって成った「続西方の人」と全く関係ない一意見に終わっているのである。

「ー我々はエマオの旅びとたちのように我々の心を燃え上がらせるクリストを求めずにはいられないのであろう。」この「続西方の人」の最後の一行が、芥川が死の直前に万感をこめて書残した、文字通り最後のキリストへの思いであるという事には異論はない。

しかしこの一行に対して鈴木秀子は、次のようなコメントを付け加えた。

「このエマオのクリストは、いかめしく裁きの座につく父なる神のイメージではない。むしろ、やさしく大地をつつむ母のイメージである」

この最後の見解が、芥川の意図とは懸け離れた鈴木秀子の観念の中に

存在している、鈴木にとっては好ましい型の芥川像の内部から生まれてきたものであるから、到底承服し難い意見と言えよう。

晩年の芥川は、何一つ心の拠り所を持つ事なく、虚無と失意の果てに死んでいったのである。もし今日、我々に何かしらの課題が残されているとしたら、それは芥川が味わった白々しい虚無感を、我々自身がいかに埋めるかという事であろう。真実自殺直前の芥川の精神状態は「海に出て木枯帰るところなき」（山口誓子）と歌った俳人よりもむしろ虚無的であったはずである。

参考文献

＊「芥川龍之介全集」（「角川書店」1巻…10巻 別巻1）
＊「現代のエスプリ」（芥川龍之介」24号）
＊「芥川龍之介の手帳」（「国文学」昭和47・12）
＊「芥川龍之介の世界」（「法政大学出版」駒尺喜美）
＊「芥川龍之介研究」（「明治大正文学研究、14号」東京堂）
＊「芥川龍之介と太宰治」（「解釈と鑑賞」昭和47・10）
＊「芥川龍之介と大正」（「解釈と鑑賞」昭和44・10）
＊「芥川龍之介の世界」（「角川文庫」）中村真一郎）
＊「芥川龍之介」（「新潮社」吉田精一）
＊「明治大正文学の研究」（「明治書院」笹淵友一）
＊「批評と研究、芥川龍之介」（「芳賀書店」文学批評の会）
＊「新約聖書」（「日本聖書協会編」）